

2018年 平和首長会議 青少年「平和と交流」支援事業に参加して

Núria Sala Ventura(カタルーニャ、グラノラズ)

ヒロシマで何を学んだか？

ヒロシマでの日々は、私にとって初めての日本文化との出会いでした。それまで私が持っていた日本のイメージは、私の国に広く行き渡っているステレオタイプのもの（それに加えて、自分の持っている本で読んだことなど）、例えばマンガ、ハイテク、スシなどだけでした。今回、日本の豊かな文化や日本の人たちを知ることができたのは素晴らしい体験でした。日本語を話せないのに日本の人たちと交流するのは大変でしたが、ありがたいことにヒロシマでは、日本語をいくつかおぼえることができました（コミュニケーションをするには不十分ですが）。日本語にも興味がわきました。

次に、広島市立大学のHIROSHIMA and PEACEプログラムのおかげで、アメリカが原子爆弾を落とすに至った政治的な決断や協議についてや、国際的な状況を支配しているその戦略についても深く知ることができました。しかしながら、第2次世界大戦の前及び最中に日本政府が用いた韓国人への差別という帝国主義的政治についても知りました。

広島平和記念資料館を訪れ、原子爆弾がヒロシマに与えた苦しみがよく分かりました。永遠に元に戻ることはない生活、完全に壊されてしまった家族、政治的な衝突や不当な戦争（戦争はどれも不当ですが）の犠牲となった罪のない人々。被爆により発症した病気、間接的な死、今日が最後の日になるかもしれないことに目をつぶりながら暮らす不安。

ヒロシマ滞在中、私は被爆者の方々が恐れや罪悪感を口にされるのを耳にしました。通常なら良いことであるはずの原爆を生き延びたという事実が、世間からの非難により、いとも簡単に地獄のような状況になってしまうとは思いませんでした。小倉桂子さんが「なぜ私が？私が生き残って、他の人たちが生き残れなかったのはなぜ？」と自責の念を持たれたことや、とりわけ「これからどうやって人生を立て直せばいいのか？」という気持ちを持たれたことがよく分かりました。今では被爆者の方々の沈黙や、すべてを忘れたいという気持ちを理解することができません。しかし、私は、人間には何ができるか、そしてそのためにどのような努力をしなければならないかを次世代に伝えていくことが大切であると、今まで以上にそう思います。

さらに、多種多様な観点から、戦争や不正と戦うために私たちが実行できる様々なシステムや行動計画についても学びました。例えば、組織的なアプローチとしては、正式な組織的運動や市民のネットワークを通して、政治的な圧力をかけることができます。学校では、平和教育に関して地方の行政を活用したり、コミュニティーの中に対話スペースを作ったり、さらには市民社会やNGOの力を活用するといったやり方です。

同時に、他の国の人たちと経験を分かち合うことはいつも、興味や目標を共有する場合はなおさら、人生を豊かにし、心躍る活動です。ですから、青少年「平和と交流」支援事業（HIROSHIMA and PEACE）への参加は素晴らしい学びの場となりました。このプログラムを通して、理解の幅が広がり、新しい考えを受け入れられるようになり、世界を理解するには様々な方法があるのだと実感するようになりました。まとめてみるなら、私たちは互いのバックグラウンドを理解し、それぞれの文化には見方の偏りがあるのだということを意識していなければなりません。仲間たちと共に学ぶことによって、ものごとをうまく扱う方法や多様なコミュニケーションのスタイルを知りました。

2. 学んだことをもとに何をするか？

ここで学んだことは貴重であり、決して無駄にすることはできません。ですから、私の学んだことが自分のコミュニティに影響を与えていけるようにしたいと思います。私は地元紙でコラムニストを務めているのですが、ヒロシマから帰って来て、コラムニストの立場を利用してヒロシマで経験したことを数週間前に記事にしたのはそういう理由です。記事の中では、ヒロシマの印象について語ると共に、青少年「平和と交流」支援事業（HIROSHIMA and PEACE）のプログラムで行われたディスカッションの際に思い浮かんだいくつかの興味深い考察についてもとりあげました。地元ラジオやまちの公報でもインタビューを受けました。

また、9月12日には市役所で会合を持ち、Josep Mayoral 市長も出席されました。ここで私は、プログラムに参加していた仲間のプレゼンで見たアイデアをいくつか紹介するとともに、クラスで議論したことに関して、いくつかの提案もしました。そこから、平和首長会議のプログラムのすべての参加者で、世界中に平和のメッセージを広めるためにビデオを撮るというアイデアも浮上しました。グラノラズ市と共に、私たちは Can Jonch 平和文化センターだけではなく、市の青少年部門も巻き込み、若い人たちにもっと自然環境、民主主義、平和の問題について意識をいっそう高く持ってもらうプロジェクトを導入しようとしています。

さらに、私のアカデミックコミュニティ、つまり私の所属する大学において、キャンパスで小さな会議をしたり、議論をしたりして、この価値のある経験を共有したいと思います。

3. 平和首長会議に対する具体的な提案

私は、平和首長会議のこのプログラムの運営に心から感謝しています。ワークショップや視察、被爆者との相互交流は、非常に興味深いものでした。ただ、私の意見として、このプログラムがいっそう良いものになるよういくつかの提案をしたいと思います。

まず、核兵器というのは、大きな問題の氷山の一角にすぎないと思います。つまり、暴力的で好戦的な文化を基盤とした世界です。だから、核兵器を廃絶するためには、

こうした文化を根絶することも必要です。私が思うに、平和首長会議は、核兵器廃絶だけを主張するのではなく、そのワークショップや活動において、あらゆる種類の兵器を現実的に削減していくよう主張すべきです。

もう少し提案をするなら、ナガサキにも原爆記念日に訪問できれば良かったのではないかと思います。ヒロシマより小さい町であるナガサキの人たちが、その後どのように暮らしておられるのか知りたいと思いました。また、ホストファミリーと過ごす時間がもう少しあれば、なお充実したのではないかと思います。参加者が日本文化を深く知るのに役立つことでしょう。